

# トップ・アスリートのための 支援・雇用に向けた企業説明会



2020年東京オリンピック・パラリンピックへ向け、日本人トップ・アスリートの活躍に期待が膨らんでいる。その一方で、充実した練習環境や経済的な安定が満たされず、不安定な状況に置かれているトップ・アスリートも少なくない。経済同友会では、2010年より日本オリンピック委員会(JOC)のアスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」に協力してきた。第5回となる説明会では、六人のアスリートがプレゼンテーションを行った。

## チームジャパンの一員として 企業に採用支援を訴える

トップ・アスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」では、2010年10月に第1回説明会を開催して以来、四年半の間に43社59人の採用実績を上げることができた。現時点では、30人が就職希望としてエントリーしている。

挨拶に立った前原金一副代表幹事・専務理事(当時)はこれまで採用に至った選手に対し、「一人ひとりが大きく成

長し、2020年東京オリンピック・パラリンピックをはじめ、国際大会で活躍できるよう大いに期待したい」と述べるとともに、説明会に集まった企業に対して「社員の一体感の醸成や業務面でのプラス効果が生まれる」と採用のメリットを示し、協力を求めた。

青木剛日本オリンピック委員会(JOC)副会長兼専務理事は「アスリートには、経済的に安心して競技に臨むことのできる環境が必要だ」と訴え、「世界中のアスリートを相手に真剣に

闘うトップ・アスリートたちの姿は、若い人に夢と感動を与える。彼らは日本の宝。その宝を育て、支えるためにご協力をいただきたい」と語った。さらに「皆さんのサポートがトップ・アスリートの明日をつくる。皆さんもチーム



青木 剛  
JOC副会長兼専務理事

ジャパンの一員だ。2020年東京オリンピック・パラリンピックを成功させるには、チームジャパンの総力を結集する必要がある」と強調した。

また、ソウル・オリンピック女子柔道銅メダリストで筑波大学体育系准教授の山口香氏がアスリートに応援メッセージを送るとともに、アスリートを採用する企業に期待される役割について語った。続いて、アスナビを通じてアイスホッケーの小西あかね選手を採用した久慈竜也久慈設計社長が社員の団結力の向上や企業のイメージアップにつながったことを報告した。引き続き、トップ・アスリート六人によるプレゼンテーション、採用を検討する企業とアスリートとの懇談会が行われた。





応援メッセージ

# アスリートの頑張りの源は 支え、育ててくれた人たちへの 感謝の気持ち

山口 香氏

JOC理事、筑波大学体育系准教授、全日本柔道連盟監事  
ソウル・オリンピック女子柔道銅メダリスト

スポーツもビジネスも  
トライ&エラーが必要

アスリートとしての経験は企業でどのように活かせるのか。それは夢を追い掛けているアスリートの姿を社員の皆さんに見せることで活かすことができます。

私は現役時代、苦しいことがたくさんあり、辞めたら楽になるだろうと思っていました。しかし、実際は引退してからの方が大変でした。

スポーツでは、たとえ勝負に負けても皆さんから「よく頑張った」「努力した」と評価されます。しかし、一歩社会に出れば、負けは許されません。私も選手を引退後、あらためて社会の厳しさを実感しました。

しかし、どのような世界でも、失敗を恐れ、夢を捨ててしまったら、前進することができないのも事実です。進化するためには常にトライ&エラー、



挑戦と失敗を繰り返すことが必要です。スポーツには、まさにそれを実践して見せてくれるという素晴らしい一面があります。

小さいころには夢をたくさん持っていたのに、いったん社会に出ると夢を諦めてしまう人が多いのですが、夢に突き進むアスリートを見ていただければ、私も頑張ろうと思っただけなのではないでしょうか。

企業の力でアスリートを  
育ててほしい

トップ・アスリートを採用するに当たって、企業の皆さんに知っておいてほしいことがあります。それは、トップ・アスリートは一般的な人と比べると、とても個性的な人が多いということです。なぜ変わっているのか。それは、人と同じことをしては、人より上を目指すことはできないからです。

このような人材は一般企業にとっては受け入れにくいかもしれません。しかし、それはぜひアスリートの個性として見ていただきたい。ただ従順なだけではなく、個性的で新しいことを創造する、チャレンジする人材がこれからの企業には必要ではないでしょうか。

また、スポーツ界は現実社会と少し距離があります。トップ・アスリートは遠征も多く、子どものころから競技

一筋のため、社会に疎いという一面も持っています。メダルを取ることこそ素晴らしいことですが、20代や30代のアスリートがメダルを取ったからといって、人間として完成しているとはいえません。メダルには、計り知れない素晴らしい価値があります。しかし、それだけでは世の中を渡ることではできません。そこでぜひ、皆さんにトップ・アスリートたちと社会との接点を作っていただき、業務を通じて社会の常識を学ぶ機会を提供していただきたい。それがアスリートたちの頑張りにもつながるはずです。

アスリートたちの頑張りの源は共に支え、育ててくれる人たちに対する感謝の気持ちです。応援してくれる人たちに応えたい、という気持ちが自分の職場から始まって、日本の、そして世界の人たちに対する気持ちへと広がり、その成果を共に分かち合うことがオリンピック・パラリンピックの価値ではないでしょうか。

2020年東京オリンピック・パラリンピックへの関心が高まっています。しかし一方で、まだ経済的に恵まれないアスリートがいることも事実です。彼らがりオデジャネイロや東京で後悔することなく活躍できるような環境を、ぜひ皆さんの力で与えていただければと思います。

# トップ・アスリートと企業とがWin-Winの関係に

福井烈JOC理事・選手強化本部副本部長は「アスナビはアスリートと企業の皆さんとがWin-Winの関係をつくることだ」と、その目的を説き、採用実績のある企業の規模や雇用形態などを報告した。また「アスリートは企業戦士としてトップを目指す担い手になる。社員の皆さんが同じ職場の仲間としてアスリートを応援することによって、会社の団結力を高める効果も期待できる」とメリットを述べ、支援を訴えた。

## 採用企業の活動とメリット

- ・グローバル企業にとっては、日本国内のみならず、グローバル拠点を含めた社員の一体感の醸成に役立つ。
- ・競技を通じた諦めない心、世界へ挑戦し続ける姿勢が社風づくりに影響する。
- ・所属企業として、メディアへの露出により高い広告効果を生む。

## ■採用実績事例紹介

### アスリートの採用で社員がスクラムを組んだ

久慈設計

岩手県盛岡市に本社を置き、庁舎や学校、高齢者施設など公共施設を中心とした建設設計を手掛ける久慈設計は2014年4月、アイスホッケーの小西あかね選手を採用した。

その前年、アスナビを通じ、当時まだ高校生でオリンピック強化選手だった小西選手を紹介された久慈竜也取締役社長は、彼女を会社に招いた。

「非常に明るく元気で、はつらつとしていた。バイタリティにあふれ、頼もしく思えた」。そう彼女の印象を語る久慈社長は、すぐに内定を出した。すると間もなく、小西選手のソチ・オリンピック出場が決定した。

これを機に、社員らが率先して激励金を集める活動を始めたという。「アスリートが一人いるだけで、社員一同がスクラムを組むほど会社の雰囲気が変わった」と久慈社長は話す。

小西選手は東京支社営業企画部に配属された。給与体系は東京支社で採用する事務職と同じ基準だという。

また、ソチ・オリンピック出場や所属チーム「SEIBUプリンセスラビッツ」での活躍、合宿の様子など、小西選手の近況を報告するニュースレター『あかねだより』を発行した。社員のみならず営業先への広報としても活用し、認知度も上がっているようだ。実際に、顧客の好感度も高く、収益向上

につながっているという。

久慈社長はアスリートの採用について、「企業にとってのプラス面はさまざまなものがある。特に、岩手県の企業としては、東日本大震災の被災者の夢と希望にもつながるのではと考えている。このような地域にアスリートをサポートできる企業がある、ということを皆さんに理解していただけるだけでもありがたい。トップ・アスリートによって私たちも勇気付けられている」と実感を語り、「アスリートの就職に向けて、皆さんの温かい理解を賜りたい」と支援を呼び掛けた。

入社一年目を迎えた小西選手は、「私が会社にいることを、社員の皆さんが誇りに思ってくださっている。今はけがをしているが、しっかりとけがを治して、これからも『あかねだより』をたくさん発行できるように、頑張っていきたい」と意気込みを語った。



久慈竜也取締役社長と小西あかね選手

## ||||||| トップ・アスリートによるプレゼンテーション ||| (2015年3月18日現在) |||



### 押切 雄大

水泳・競泳

21歳。競泳200m平泳ぎ日本代表。  
2016年日本大学卒業見込み。

5歳から水泳競技を続けてきましたが、中学・高校では思うような成績を残せませんでした。しかし、現在の指導者から、自ら考えて成果を出すという自主性を重んじた練習法を与えられ、成績が伸びるようになりました。さらに高いステージを

目指し、質の高い厳しい練習を自らに課してきました。そして大学三年で迎えた日本選手権では多くの強豪選手に競り勝ち、パンパシフィック大会の代表となりました。昨年の世界短水路選手権では6位に入賞し、世界で闘う自信も付きました。

就職後も高い目標を持ち、アスリートとして成果を出すことと、会社で成果を出すことの共通点を見いだしたいと思います。



**菊池 萌水**

**スケート・ショートトラック**  
22歳。ソチ・オリンピック日本代表。  
2016年早稲田大学卒業見込み。

大学三年間、私はナショナルチームの当落線上にいました。オリンピック出場のためには、自分の長所を最大限に活かすことが近道だと思い、スケート靴の調整を自ら行って体の感覚をコントロールし、競技力と精神力を身に付け、ついにオ

リンピック出場を果たすことができました。

今季のユニバーシアードでは、リレー競技で初めて決勝に進出できました。個人の帰属意識を高めることでチーム力が上がり、成果につながったと思っています。この経験は企業で働く上でも非常に大切だと思います。

これからさらに世界で通用するスピード力を磨き、平昌オリンピックでは金メダルを目指します。



**岩原 知美**

**アイスホッケー**  
27歳。2013年女子日本リーグ優勝。  
SEIBUプリンセスラビッツ所属。

高校生で日本代表に選出され、ユニバーシアードなどに出場しましたが、ソチ・オリンピックには選出されませんでした。悔しい思いで試合をテレビで見ました。日本が勝つために、ここ一番の得点力で貢献できるように、再び厳しいトレーニン

グを積み重ね、今季は日本代表として世界選手権に選出されました。

アイスホッケーは22人全員でプレーするチーム競技です。私は「いつも明るくどのようなときも諦めずに一生懸命」をモットーとするムードメーカーとして、企業でもチームワークを大切に、皆さんへの感謝の気持ちを忘れず、常に会社への貢献を考えて活躍したいと思っています。



**藤井 桜子**

**ビーチバレーボール**  
24歳。2014年仁川アジア大会5位。  
2015年日本体育大学卒業。

私は、高校生の時に海外選手との力の差を感じ、大学に進学後、アメリカに留学しました。アメリカでは自分の意見をしっかりと持っていないとコミュニケーションを取ることができません。最初は苦労しましたが、仲間との共同生活や積極的な

交流で州大会優勝、MVPも受賞できて自信が付ききました。また、短時間集中トレーニングや科学的に戦略を練ることを学ぶとともに、ピンチでも諦めない姿勢や粘り強さが発揮できる日本人としての強みにも気付きました。

これからの一瞬一瞬の行動やプレーがすべてオリンピックにつながると思い、「今を生きる」をモットーに、何事にも全力で取り組んでいきます。



**久良知 美帆**

**フェンシング**  
21歳。2014年全日本選手権団体3位。  
2016年法政大学卒業見込み。

高校三年間、JOCエリートアカデミーに所属していましたが、ここでの経験で、掛かる重圧を乗り越える自信が付きました。

例えば、どこで人との差を縮められるのかを自ら考え、自分らしい勝ち方を見つけることができ

ました。また、お互い切磋琢磨できる異競技の仲間が存在、そして、総キャプテンをさせていただいたことは貴重な経験でした。さらにこのエリートアカデミーで培ったことは、何事にも目標を持ち、最後まで諦めないことでした。

現在は大学でキャプテンを務めています。これからは人としても大きく成長し、たくさんの人に夢を与えられるような人になりたいと思います。



ビデオ・プレゼン

**福本 温子**

**ボート**  
26歳。  
ロンドン・オリンピック12位。

ボートは2,000m先のゴールを目指して後ろ向きに進む競技です。そのため約七分間、ゴールを見ることはできません。しかし、後ろ向きに進む競技だからこそ、自分を信じ、同じボートに乗るクルーを信じるという前向きの気持ちが大事で

す。その気持ちが直接結果につながるのです。

私はボート競技を通じて、皆さんとボートの素晴らしさを共有したいと考えています。私のモットーは「明るく元気にリオデジャネイロ、明るく元気に東京オリンピック」。必ずメダルを獲得し、皆さんと感動を共有したいと考えています。競技と仕事の両立を図り、皆さんと一緒に明るく元気に頑張りたいと思います。

トップ・アスリート支援についてのお問い合わせ先

JOCキャリアアカデミー

■e-mail : [career@joc.or.jp](mailto:career@joc.or.jp)

■TEL : 03-5963-0354

※電話受付時間は平日の午前10時から午後6時まで